



●パーソナルカラーの測色

物体色の評価手法には、正反射光を含むSCI方式と、これを除去したSCE方式がある。パーソナルカラー診断で使用されるドレープや色票の多くは、拡散反射光を主体とする素材であるため、比較対象となる肌もSCE方式で測定することで、布地と肌という異なる媒体間の「色の調和」を同一条件下で精度よく検討することができる。

また、SCIとSCEの差分は、肌の光沢度や肌理といった「質感」を定量的に把握する重要な指標となり得る。ただし、この差分には「健康的なツヤ」だけでなく、皮脂や汗による過剰な反射や測定環境によるノイズ等も含まれる点に留意が必要である。

パーソナルカラーには、特定の色彩を配することで、肌固有の色みを維持しつつ適度な光沢感を付与する効果がある。

これは色彩調和論における「色相の合致」を超え、肌の質感とドレープの光学的特性が、輝度次元において理論的に整合した状態と捉えることができる。

以上により、SCEを基準としつつSCI差分を補助指標とする手法、パーソナルカラー診断の再現性と客観性を基礎づける有効な枠組みになり得るといえよう。(幹事：榎芳栄)

●日本の伝統的な色名 胡粉色

胡粉色(ゴフンイロ)の「胡」は、古代中国の北方民族を指し、匈奴、羯、鮮卑、羌、氐が五胡で、それらの民族は胡(えびす)と呼ばれ、その地で取れた白色顔料の鉛白を「胡粉」と呼んだことから日本語として定着していった。

清少納言は枕草子に、「いやしげなる物、胡粉、朱砂など色どりたる絵ども書きたる」(第百四十二段)と美意識を披露している。

胡の字は外国品の接頭語になり、現在でも、胡椒、胡麻、胡瓜、胡桃、胡坐などが日本語に定着している。

胡粉は古代から全く異なる二つの顔料名に使われており、その一つが鉛を焼いて粉末にした鉛白である。鉛白は塩基性炭酸鉛が主成分で、白さにまさり、隠蔽力が強いので、塗料、絵の具の他、白粉としても使われていて、上流社会での鉛毒による乳児の中毒事故などが伝えられている。

もう一種類は国産品で、蛤、牡蠣、帆立貝などの貝殻を焼いて砕いて粉末にしたものも胡粉という名で白色顔料として用いられていたが、現代では、白色顔料の大部分は、無毒で白度が高いチタン白と呼ばれる酸化チタンに置き換わっている。(永田泰弘)

●大辞泉ひろいよみ 117ーし

朱印船：しゅいんせん。近世初期、朱印状を受けて外国との貿易に従事した船。豊臣秀吉の朱印状を携えた南蛮貿易船に始まったが、鎖国により全面的に禁止された。御朱印船。しゅいんぶね。

朱印地：しゅいんち。江戸時代、朱印状によって所有を認められたり下付されたりした寺社領。御朱印地。証文地。

秋色：しゅうしよく。秋の景色。秋の気配。秋らしい趣。

朱漆：しゅうるし。朱色の漆。透漆に朱や弁柄を混ぜてつくる。あかうるし。

朱夏：しゅか。五行思想で、赤色を夏に配することから、夏の異称。

朱書き：しゅがき。朱で書くこと。しゅしょ。楊弓で二百矢のうち五十矢以上百矢までの命中すること。また、その射手。命中させた者の名を朱でかいたことからいう。

朱学：しゅがく。朱子学。

朱傘：しゅがさ。地紙を朱色に染めた長柄の差し傘。戸外の法会や儀式などで、導師などに後ろから差しかざして日よけ用とする。また、室町時代には貴人にも用いた。しゅがらかさ。

*大辞泉：小学館発行国語辞典 (永田泰弘)